

# 家庭の教育機能

—幼児の人格形成におけるその役割—

岡田敬司

## 序

家庭が子供の人格形成にとって重要な役割をはたすことは誰しも認めるところである。我々は人格という用語を「個人の中にその人間関係の特有の形態を与える諸特徴」という意味で用いるのだが、家庭での人間関係が他の集団でのそれに比してより永続的な人間関係の基調を個人に与えるのは、家庭が他の集団と同じく社会構造の一単位でありながらも、人間が幼児期をもっぱらそこで過ごすということによって特別の心理的意味を持つからである。客観的には親との関係、同胞との関係は他の集団での人間関係と同じく達成すべき諸々の適応の一項である。が、幼児にとっては両親、同胞は他者一般の一項ではなく他者の原型であり、更には自己の原型でさえある。そして家庭は社会の一要素ではなく社会の原型なのである。家庭における幼児期体験の重要さはこの視角でこそ十全に捉えることができる。というのも、それは発達的一段階においてのみ、又家庭という場においてのみ求められる態度、習慣を形成するにとどまらず、人間関係一般の基調、社会生活への基本的構えを形成するからである。

この幼児期の人格形成を家庭での情緒的過程において捉えていきたい。確かにそれは知的認識の発達過程と無関係ではないが、幼児期の人格発達の主軸を成すのは情緒力学である。なぜならこの人間関係は人物の識別に先立ってまさしく情緒的過程として始まるのであり、又先に定義した様な人格はその人間の情緒性、情緒の発動傾向に他ならないからである。さて、幼児の人格形成を情緒性の問題として考察する場合、個々の情緒形態に対する一般的な価値評価は保留しておかねばならない。例えば嫉妬、優越欲等は悪しきものであり、愛、協調性等が善きものであるといった価値評価は倫理的に妥当であるにしても、そのまま幼児に適用することは出来ない。倫理的評価は一般に対等な人間関係を前提にしているが（例えば自由意志の主体として）幼児の人間関係の中心をなす親との関係にあっては状況の不対等は本質的なものであり、そこでの情緒形態は自ずと別の価値評価を要する。後に見る様に、幼児の人格発達の全体からみれば、それらの評価は極めて一面的であり、悪しき情緒形態と目されるものでも、その持つ形成的意義を把握することが必要となるのである。この様な形態は幼児の無力さ、大人—子供関係の不対等に起因するものであり、子供がこの生の条件を克服していく際に不可避な葛藤の現れなのである。この事情を理解してはじめて一般的な道德教育、情操教育も有効に行われ得るのである。

ラカン Jacques Lacan の所論を手がかりにして、幼児の発達に応じた情緒形態の発現をその発達の意味に主眼をおいて捉えていきたい。注目すべきはこの幼児期の人格発達の各段階が家庭での典型的な対人関係—対母親、対同胞、対父親—の各項に対応している点である。家庭における情緒的過程が各々の親のパーソナリティの差異やその他の家族構成上の諸々の差異に様々な影

響をうけるにしても、基本的な点でこの様な一般性を持ち得るのは家庭における親の在り方、態度といったものが社会的、文化的に規定された側面を持つからである。それは親や同胞がいわばその存在自体によって担っている幼児の人格形成上の機能であり、社会制度としての家庭の構造が有する機能であるが、この理解は子供のより良き発達を望む親の自覚的な在り方、教育的配慮を考える際の一つの支点となり得るであろう。

## I ラカンにおけるコンプレクスの概念

コムプレクスという用語は一般にネガティブな色彩の濃いものである。それは過去の生活体験において形成された強い感情を伴った観念複合体であり、その働きは「無意識的で」主体の自由な発想を「束縛する」<sup>1)</sup>。つまりコムプレクスは心理的しこりであり、人間を過去に縛りつけるものであるともいえよう。この様な捉え方は、それが人格、意識の統制の乱れた病的現象、夢等を通じて発見されたものであってみれば、むしろ当然ともいえるが、人格形成の現象を捉える概念としては必ずしも充分ではない。むしろラカンのコムプレクス概念の方がより一般化されたものであり、積極的なものと考えられる。彼に依れば「コムプレクスは反応の全体を一つの固定した形態へと結びつける。これは情動から対象への適応行動まで、あらゆる類の有機的機能に関わり得る」ものであり、「その活動はこの現実の更なる客観化を必要とする様な経験がなされる度に、体験の中にこの同様に固定した現実を再生する」<sup>2)</sup>。つまりラカンのいうコムプレクスはある状況に対応した典型的態度であり、後の行為一般の組織に際して基礎となり得るものである。

さてコムプレクスはイマゴ(像, *imago*)の現前によって表現されるのであるが、フロイトにあってはコムプレクスが本質的に無意識的ファクターであることからして、イマゴは「無意識的表象」といった矛盾したものになる。ラカンは意識の主導下でないコムプレクスの現れを否定はしないが、彼のコムプレクス概念はそのイマゴを意識していることを排するものではない。それは少なくとも情緒的雰囲気として意識に現前し得るものである。後に見る様にイマゴは無意識的なのではなくイマジネールな形成、つまり意識の前への草案なのである。メルロ＝ポンティ M. Merleau-Ponty が評した様に<sup>3)</sup>ラカンは回顧的概念 *conception rétrospective* を試掘概念 *conception prospective* に置き替えたのである。このことはラカンが「コムプレクスが精神発達において“組織因 *organiseurs*”としての役割を演じる」<sup>4)</sup>ことを明確に述べていることでも明らかであろう。コムプレクスは無意識の末端的ファクターにとどまらず、主体の中核での「より人格に統合された事象」にも関わるのであり、これから検討していく三つのコムプレクスはまさしくその様なものである。

尚、ラカンはコムプレクスと本能を明確に対比させる。「コムプレクスの一般的典型性 *typicité général* は社会集団の法則に関係し、本能の属的典型性 *typicité générique* は種の固定性に対応する」<sup>5)</sup>のである。これはラカンの特徴である精神病の心因的把握<sup>6)</sup>からしても当然といえる。その一般的な当否の問題は本論文の対象領域をこえるものだが、この方向が人格形成を徹頭徹尾人間の営為の問題として捉えることを促すものであることに注目せねばならない。確かにそれは個々の親の自覚、意図を超えた社会文化的法則性に関係するもので、当面の問題については家庭の家族制度としての側面に関わるものである。しかし制度一般が既に存在する与件であると同時に我々が担い、もしくは変革すべき課題である様に、この社会制度に対応したコムプレクス

の典型性は我々の企図に閉ざされてはいないのである。この意味でコムプレクス概念による幼児の人格形成論は、それを人間の教育的営為の産物として捉え、かつ教育的企図に開かれたものとして捉えることを可能ならしめるものだといえよう。

## II コムプレクスの概念による幼児の人格形成論

### ① 母子関係と離乳コムプレクス

母子関係を通して形成されるものとして、ラカンは離乳コムプレクス *le complexe du sevrage* をあげる。「離乳コムプレクスは養育関係——人生の最初期に不可避な寄生的様式——を心に固定する。それは母イマゴの原初の形態を示す。従って離乳コムプレクスは個人を家庭に結びつける最も太古的で安定した感情を基礎づける」<sup>7)</sup>のである。ところでこの最も原始的のコムプレクスにして既に本能とは異り、文化的ファクターに支配されていることに注意せねばならない。確かにそれは一定期間の授乳という哺乳類共通の生物学的事象に関するものだが、「動物においては母性本能は養育（授乳）の目的が達せられた時に機能を停止するのに対し、人間における離乳を条件づけるものは文化的調整 *régulation culturelle*」<sup>8)</sup>なのである。このことは離乳が勝れて心理学的事象であることを意味する。その生物学的不確定は、離乳が母親にとって一つの心理的態度をとることであると共に、子供においても心理的態度の発現を促すのである。ラカンは離乳においてはじめて「生命的緊張が心理的意図に変わる」<sup>9)</sup>と述べている。この意図によって離乳は受容されたり拒まれたりするわけだが、ここで注意すべきはこの受容もしくは拒否を選択と考えてはならないことである。というのも「それを肯定したり否定したりする自我が存在しないので、この二つは相矛盾するものではなく、反対ではあるが共存する二極だからである。そのいずれが優勢であれ、それらは本質的に両面的 *ambivalente* な態度を決定するのである。」<sup>10)</sup>この両面性は子供の心的機構の未熟さに対応するものであるが、他面では離乳における状況そのものが両面的であるといえよう。離乳に先だつ時期では母の意に従うことと、不快、緊張を除くことが一般に合致していたのであるが、離乳と共に両者は分離する。又母親の側でも、子供を自立させようとする配慮と、つきはなしてはかわいそうだという気持が少なからず並存するのである。ともあれ離乳はいかに両面的とはいえある態度の発現を促すのであり、授乳期における母子関係の全面的相補性——子供の側の固有の態度の不在——から子供を脱せしめる契機なのである。それ故このコムプレクスの積極面は離乳の拒否にあり、この事実上の分離を補償すべく、養育者＝母との関係を再構築（いわゆる対象関係）する契機になることがこの形成的意味である。しかしそれは態度の豊富化を促すに違いないにしても、一つの危機であり、無条件に発達に結びつくわけではない。ラカンが「死の渴望 *l'appétit de la mort*」と呼ぶ神経性食欲不振等は明らかに形成的ではないが、それでも「これらの死への自己放棄の事例の分析は、患者が母イマゴの再発見に努めていることを明らかにする」<sup>11)</sup>のである。離乳を契機とする発達は、スピッツ René A. Spitz がこれを「8ヶ月苦悶」と呼んだように<sup>12)</sup>、多少とも葛藤を伴ったものであり、その故にこそ親の教育的配慮に開かれた課題性をもつといえよう。

ところでラカンが指摘するところでは、このコムプレクスは更に一般的な人間の早産性という種的事実に根を持つものである。それは出生時の外傷的経験の記憶（O. Rank）ではなく（ラカンに依れば出生時には外傷的経験を記憶する程中枢神経のミエリン鞘の形成は進んでいない）<sup>13)</sup>、

子宮外環境への適応不全による不快感という生後の持続的内部感覚に基くものである。そしてこれは先の「死の渴望」において母の乳房のイマゴのみならず母胎イマゴ（母胎への回帰願望）が認められることで示されるものである。これはフロイトの「死の本能」、ユングの太母にも対応するものであろうが、ラカンにあってはこの心的な死への傾向は生得的生命的機能に対応するものではなく、この生命的機能の生得的な不全に対応する<sup>14)</sup>ものであり、つまりはコムプレクスのものである。

出生と離乳は共に母親からの別離を意味し得る（sevrage は離乳と別離一般との両方を意味する。）だけでなく、生物学的不全、未決定に対応している点で共通しており、この原初の漠とした分離に最初の心的表現を与えるのが狭義の分離＝離乳なのである。ここで常識的ではあるが母子関係の条件について若干指摘できよう。スピッツが「最初子供には快—不快の感覚対比はなく、不快と平静の対比があるのみだ」<sup>15)</sup>と指摘した様に、この最初の苦悶が全面的である以上、授乳期におけるその補償が不可欠であり、十分な配慮によって子宮外世界での生に一定の安全感を獲得して始めて離乳に耐えられるし、又離乳が他者との心理的、情緒的生への出立となり得るのである。

カーディナー Abram Kardiner によれば、アロール島社会では十分な母親の世話は生後二週間で終る<sup>16)</sup>。この極端な早期の母子分離は一時的なものではなく以後の子供の扱い方の特徴である放置、非一貫性につながっているもので、結局子供は安全感の中核となるべき母親イマゴを形成しえないで終る。この母子関係の崩壊の結果は、この社会が孤立社会であり静止的シエマの社会であることと相まって成人のパーソナリティに端的に認められる。「互いの傍で生きているが共に生きているのではない」<sup>17)</sup>というロールシャハテスト結果の総評は、離乳コムプレクスが人間関係構築の原初の資本となるかどうか母子関係の親密さに大きく依存していることを示すものである。無論離乳に代表される母子分離は遅ければよいといったものではない。それは情緒的安定の代償として子供を幼児性にとどめ、自律化を遅らせるであろう。だがその時期を決定するのは諸々の文化であり、この意味で発達の正常性の尺度は文化的に相対的なものである。明らかかなことは、遅かれ早かれ子供の自律化は全ての社会で要請されるのであり、この情緒的生への出発点までにおいては過保護は放任に勝るといふことである。更に留意しておくべきは母子関係の十全さは後の人格発達の必要条件であっても、十分条件ではないという点である。これは後に見るようにエディプス期でのつまずきの問題である。

## ② 同胞関係と闖入コムプレクス

ラカンが闖入コムプレクス *le complexe d' intrusion* と呼ぶものは典型的には弟妹に対する嫉妬を媒介にして形成されるものであり、彼はこれを社会的感情の原型として位置づけている。一見反社会的と思われる嫉妬が社会的感情の原型であることは発達の見地でこそ理解出来るものである。先ずそれが根底的には「生命的対抗ではなく心的同一視である」<sup>18)</sup>ことに注意せねばならぬ。単なる対抗の現象は6ヶ月からでも観察出来るが、それは主体の意識を前提する必要のないものである。ただこの反応が起きるには2幼児の年齢差が極く小さい(2.5ヶ月以内)<sup>19)</sup>ことを条件とすることから、ライバルとしての他者認識が一定の身体的類似性、知覚—運動機能の類似性に根を持つことを示すものではある。年齢差が大きい場合見栄、専制等の態度が現れるが、そ

れは「2人の中の葛藤ではなく、各人の中での対照的、相補的な2つの態度の葛藤である。」<sup>20)</sup>各人は状況の2極を未分化なまま生きる。このような現象はワロン H. Wallon が混淆的社交性 *socialité synchrétique* としてその一連の系列を示した<sup>21)</sup>ものであり嫉妬もその一つであるが、ワロンが他者のイメージと自分の実体の混同、未分化といった側面に主眼をおくのに対し、ラカンはその積極的側面により注目しているようである。「この時期の同一視は他者感受性 *sentiment de l' autre* に基いており、その全面的にイマジネールな価値を捉えねばならない」<sup>22)</sup>のである。

母の胸に抱かれた弟妹に対する嫉妬は、単に己れの欲求の障害たる限りでの他者に対する対抗につきるものではなく、他者の感じる全てを想像的に感じとり、この他者と自分との相違、対立を感じ嫌うところに成り立つ。このことは「離乳から長くたっていて弟妹との（乳房をめぐる）対抗の状況にない子供の場合にも嫉妬が発現し得る」<sup>23)</sup>ことでもわかる。ここで同類の像が情緒的価値をもっていることが必要だが、これはラカンが鏡像段階 *le stade du miroir* と呼ぶ自己の身体の見え像と自己自身の同一視において、6ヶ月段階で既に認められるものである。それは主体の運動性の調整不全に比して理想的な一体性をなしており、それまでの窮境によってその価値を高められているのである。それは自他の識別に先立っての身体像へのとらわれであり、同胞の身体像も類同の情緒的価値をもつのである。これは2.5歳頃迄続くもので、例えば専制的態度では同類のイマゴは主体のイマジネールな産物であり、その限りでこの対人関係はナルシシクなものにとどまるのである。嫉妬における対立を契機に主体は真の他者との関係の構築を促される。「同一視によって嫉妬に入った子供は、現実の運命がそこに働いている新たな二者択一に至る。つまり母対象を再発見して現実の拒否、対抗者の破壊に執着するか、何か別の対象へと導かれ、それを人間知に特有の形態の下で、つまり交流可能な対象として受けとるかである……。」<sup>24)</sup>この嫉妬の乗り越えは何ら愛他主義の様な道徳律の出現を意味するものではなく、他者が対立と協調の相手、つまりは社会的他者となることであり、その形成は同時に主体の相対化、社会的態度の獲得を意味する。要するに嫉妬は社会的自我の形成の契機なのであるが、更に一般に「人間の知の全体を他者の欲求による相対化の中で決定的に動揺させ、その対象を他者の競争による抽象的等価性の中で構成」<sup>25)</sup>すること、つまり人間の知の客観性の基本的性格に連がるものでもある。ラカンが主張するのはこれが根本的には己れの自然の無視、自己疎外であり、その発端が身体像へのとらわれ、同一視というイマジネールな働きの中にあるということである。ともあれ、子供が嫉妬に落ち入る局面においても、嫉妬がその対象によって決定されるのではなく、（これは単なる対抗、相互反応の場合である）逆に他者という対象を形成するのだという能動的側面を把握しておかねばならないだろう。

さて、同胞関係がこの様に自他の社会的関係の問題として語られ、又逆に社会性の発達が子供間の現象を通して捉えられるのは、親との関係に比して子供間の関係が明らかに大きな状況の平等性を有するからであり、又逆に我々の理念としての社会的関係が主体間の対等性を前提するものだからともいえる。これが純粹の知的認識の発達過程でなく情緒性の問題として現実に発現するのは、子供の生の主軸が大人との関係にあることと無関係ではない。ここで問題とした嫉妬についていうならば、それは母との関係を前提とするものであり、先に見たように同胞との情緒的關係が年齢に応じた内部発生的発達の側面を持つにしても、嫉妬の発現、その乗り越えの様子は、

それに先立つ母親との関係、及びこの時期の親の態度に大きく左右されるのである。

端的な例をカーディナーの報告によって示すと、母子関係の親密なブレインヴィルでは兄弟間の嫉妬、対立は一般的に認められる<sup>26)</sup>が母子関係の崩壊したアロール島では親に期待するところが少なく争うべきものがないので兄弟間対立はさ程発展せず、逆に強い愛情が形成されることが多いのである<sup>27)</sup>。又我々の社会でも、末子の場合とか一人子の場合とかは他家の子供との関係が弟妹との関係に類似した構造をとり得るが、明らかにその典型より平盤なコムプレクス形成にとどまるであろう。しかし同類との関係の真の形成は少年期以降に著しい進展をみるし、又自他の相対化はエディプス期でも課題となることからして、この時期の同胞構成の条件は取り返しのきくものであり、親子関係のそれ程決定的なものではないと思われる。尚、エディプス期を経てから弟妹が生まれた場合、嫉妬は同一視による葛藤のプロセスをとらず、嫌うにしる、愛するにしる、はっきりと他者への態度として現れることに留意しておきたい。

### ③ 父子関係とエディプスコムプレクス

エディプスコムプレクスは一般に次の様に捉えられている。4年目頃に子供の性衝動が一つの頂点に達し、これによって最も身近な異性、つまり異性の親への近親相姦的愛着がひきおこされる。がこれは子供の自身の能力の未熟さや教育的禁止によって実現を阻止される。子供は自分に禁じられた状況を漠然と、又偶然の目撃によって直観するのだが、このプロセスの中で同性の親は性禁止の番人として、と同時に違反者の例として現れる。この緊張は一方で性傾向の抑圧によって、他方で親イマゴの昇華によって思春期までに解消するが、この2つのプロセスが2つの内的審級として刻印される。つまり抑圧するものとしての超自我と、昇華するものとしての自我理想である<sup>28)</sup>。

ところで、ラカンに依れば「エディプスコムプレクス le complexe d'Œdipe はあらゆる水準の心理現象を呈するが、精神分析の理論家達は己れがそれに帰した諸々の機能を明確に定義しなかった。というのも、その諸機能をそこに基いて説明すべき発達の諸平面を明確に区分しておかなかった為である。」<sup>29)</sup> 実際フロイトがエディプスコムプレクスと呼ぶのは端的には異性の親へ愛着を感じ、同性の親を競争者と感じる心的態度であり<sup>30)</sup>、それは男児の場合母親への愛着であることから、先にとりあげた「離乳コムプレクス」もエディプスコムプレクスと結びつけられるし、更にそれが嫉妬に他ならないことから「闖入コムプレクス」もエディプスコムプレクスの広がりとして捉えられる<sup>31)</sup>。これらの関連性自体はラカンも認めるところであるが、それらを明確に分節化した上でエディプスコムプレクスの独自性を捉えねばならないのである。このことはエディプスコムプレクスの各次元を区分して捉え、かつそれらを構造へと結合することでなされ得るのである。各次元、即ちこのコムプレクスのかかわる発達の諸平面とは、その形成の局面においては性の成熟と現実の構成であり、その消滅もしくは乗り越えの局面では性の抑圧と現実の昇華である。

「性の成熟はその基本的傾向を形成することでエディプスコムプレクスを条件づける。逆にこのコムプレクスは性の成熟をその対象へ向けることでそれを促進する。」<sup>32)</sup> ここで男児のエディプス欲求の対象が離乳コムプレクスのそれと同じく母親だという点に注意せねばならない。つまり「死の傾向」の再発、口唇期への性的退行がおこり得るのである。尤もこれは心理的袋小路にと

どまるものではなく、後に見る様に男らしさへと転換し得るものである。女兒ではこのような明確な危機を経ることはない。というのも離乳コムプレクスで形成された傾向とエディプス欲求は中和し合い、「コムプレクスのポテンシャルを下げる」<sup>383)</sup>からである。

現実の構成とは体験のノルムの構成であり、ここにコムプレクスのもたらすものは「対象のある深み」「対象にその実存を付与する密度」「距離感を与え、注意を吹きこむパースペクティブ」<sup>384)</sup>等である。これらは一般に現象そのものと区別されない次元であるが、妄想における現実のゆらぎのスペクトルによって主題化され得るのである。これはリヒドー備給として語られてきた問題と重なりあうものだが、ナルシックなりヒドー備給との対比でいうなら、エディプスコムプレクスにおけるリヒドー備給は対象に性差による価値づけをもたらすであろう。

性の抑圧についてはラカンはフロイトの去勢コムプレクスによる説明<sup>385)</sup>を明確に批判する。「去勢幻想を現実の(父親の)恐迫に帰するならば、それは諸傾向を認識する際の天才的力動主義者であるフロイトが伝統的原子論にとらわれ、形態の自律性に対し閉ざされたままだったからである。」<sup>386)</sup>臨床経験の示すところでは、去勢幻想は一連の身体細分幻想の一環であり、母親との関係に起源をもつものである。この身体の断片像は鏡像段階での統一像の獲得に先立つ時期のナルシックな対象であり、母との別離に際して主体がこれらの像に与える防衛的価値に条件づけられているのだ。先に離乳コムプレクスで、又闖入コムプレクスで母イマゴが「死の傾向」をひき起こすことをみだが、それは主体の活動性の全面的な抑圧に他ならない。エディプス期の苦悶は主体が再活性化する母対象に起因するのであり、これに耐える際の抛り所が去勢幻想に認められる自己像である。それは母の喪失を乗り越えることと性抑圧の結びつきを示すものであるが、この超自我の原初形態は主体の性差に関らないことに留意しておかねばならない——出生、離乳が主体の性差に関らない様に——。結局ラカンの強調するところは、内的な抑圧の審級の形成が外的抑圧、現実の恐迫の単純な反映によっては理解され得ないという点であろう。それは「現実の厳しさとは逆の理由で」<sup>387)</sup>、つまり主体自身のイマジネールな働きによってその厳格さを確立するのである。「超自我がそのナルシックな形態を超えるのはエディプスコムプレクスの中である。」<sup>388)</sup>というのは、この様な超自我の内的核をもってはじめて、大人、親の権威といった外的抑圧を分化することが可能になり、かくして教育的な禁示、罰が有意味になり得るということであろう。

現実の昇華は主体の世界に対する構えが幼児的なものから大人のものへと転換することであり、求める態度 (captativité) から与える態度 (oblativité) への移行<sup>389)</sup>による世界の基調の変換といえる。それはエディプスの葛藤の解決を通してなされるのであり、それ故エディプスコムプレクスの人格形成にもたらす積極的価値に他ならない。この解決はフロイトが示した如く、一般には主体の同性の親への同一視による。だがラカンに依れば、フロイトにあってはこの同一視は第2のナルシスムとされ、ナルシックな同一視との区別が不充分である。ラカンの主張するエディプスの同一視の独自性は先ず「親イマゴが演じる機能のアンチノミー」に認められる。つまりそれは無意識の超自我の形態で性機能を抑圧する一方、意識的な自我理想の形態で性機能を保存するのである。この二重性は「同一視の対象が、ここでは欲求の対象ではなくエディプスの三角関係で対立する対象だということ」に起因する。「擬態的同一視は贖罪になり、このサド、マゾイックな対象は主体から離れ、恐れと愛の両面性の中へと主体から距離をとる。そしてこの現実へ

の途上で欲求の対象は隠される。」つまり「エディプスコンプレクスの中で新たな現実の中に対象を設定するのは欲求の契機ではなく主体のナルシシクな防衛の契機である。」<sup>40)</sup>というのはこの対象は欲求の障害としてと同時に、違反者、勝利者として現れ、これに同一化することは自我に安全をもたらし、それ故防衛的価値を有するのである。しかしそれは又、自我に対立して、それを消沈させたり高揚させたりする理想でもある。この「亀裂の光 *lumière de l' étonnement*」によってエディプスコンプレクスは「手本の機能」を果し、無限の創造性を含み得るわけである。

この様な形態はあらゆる危機の乗り越えに際して認められるものであろう。先に見て来た離乳、闖入の危機についても、その真の乗り越えは対象の変形によってその直接的な欲求との対応を断つことを要する。しかし先の母イマゴ、同胞イマゴは欲求の単なる裏返しであり結局はナルシシクな葛藤を現すものにとどまり、「手本の機能」を果すことによって昇華へと導くには不適であった。

ラカンに依ればこの様な昇華の機能を担う最適のものは父親のイマゴである。母イマゴは先行段階で既に超自我の機能を担っており、この干渉によって昇華においても自我理想と超自我の統合されない両面性にとどまりよいのである。父親イマゴは「その純粋性」の故に、両性において自我理想の完全な形態をとり得る、つまり「男児においては男らしき理想、女児においては処女理想」<sup>41)</sup>である。「このイマゴの衰弱形態、とりわけそれを不具、盲として表象する形態は昇華のエネルギーを創造的方向からそらし、又ナルシシクな統一、理想に逃避させるものである。……父の死は、それが発達段階、とくにエディプス期との関係で現実性の進歩を涸らす傾向を持つ」<sup>42)</sup>のである。

エディプスコンプレクスが諸々の偏倚、神経症の原因として発見されたのは、未完の、失敗したそれが先ず発見されたということであり、それらの悪しき結果は父親の力の恐迫の事実によるよりはむしろ逆に、父親の支払い不能によるのだということである。父親に代表される現実の抑圧、権威は、それが自我理想に結びついている限りにおいて阻害因ではないのである。

さて、エディプスコンプレクスは二重の意味で複雑である。一つはそれが先行コンプレクスの函数であること、もう一つはそれが「父親の在り方」という社会的条件に規定されることによる。先のアロール島についてカーディナーは「父母のけんかが頻繁であり、これは父親を嫌うべきライバルと見做す観念、つまりエディプスコンプレクスの発達の機会である。」<sup>43)</sup>と述べている。しかし母への愛着の希薄さによって、この父親との対立は三頂葛藤ではなく、単なる二頂対立にとどまることを見なければならぬ。エディプスコンプレクスが著しい心的分化をもたらすのは三頂葛藤のダイナミズムによる (Merleau-Ponty) のであり、「超自我機構の一般的低調、抱負のレベルの低さ」<sup>44)</sup>は、失敗したエディプスコンプレクスの形態であるが、ここではむしろ、先行コンプレクスの不全さの結果であろう。愛着が十分に形成されていてエディプスコンプレクスがない例は、トロブリアンド島に認められる。これは性抑圧の極小なことにもよるが、父親の役割が愛情をもって子供を養育することだけで、抑圧、権威は母方のオジに委任されている<sup>45)</sup>という特殊な父親の在り方に大きく関係しているのである。ラカンに依れば、父親イマゴが抑圧と昇華の両機能を担っていること、つまり父権の特徴こそエディプスコンプレクス形成の十分条件であった。従ってこの機能分離は「調和を含む代りに創造を欠く」というのである。確かにトロブリアンドは、いわゆる未開社会であるから、この限りで文化的遅滞は否定し得ないであろう。一方



アメリカ農村のプレインヴィルでは性抑圧は強固である。父親は権威をもっており、体罰を科すことでその拡張をはかる。カーディナーはこの性抑圧を軸とする活動遮断システム blocked-action system が初期のすばらしい養育の大きな障害となり、憶病、不安、企図の欠除を導くとし、これをエディプスコムプレクスに対応させた<sup>46)</sup>。ところで我々がラカンに依って修正したエディプスコムプレクスは逆に進歩への動機づけとなるはずであった。このラカンの条件を満たした社会が、何故に失敗したエディプスコムプレクスに終るかは考察する必要がある。まず、エディプスコムプレクスが先に見た様に幼児期葛藤の一定の解決として形成されたとしても、本質的に安定、充足を排する心理構造であることから、常に失敗と表裏一体であることに注意せねばならない。これはエディプスコムプレクスが先ず失敗した形態においてフロイトに依って発見されたことと無関係ではなかろう。プレインヴィルにみられる抑圧の過剰の危険は常に存在するのである。確かに理論的には家父長的権威を父親が体现し、父親イマゴが昇華の機能を担うことでこの害はさけられよう。しかしラカンの仮説通りに、エディプスコムプレクスに於ける昇華のエランが文化の発達、社会全体の創造性に結びつくのであれば、その帰結である動的シエマの社会「熱い社会 (Levi-Strauss)」<sup>47)</sup>は、現代にみる様に不断の変化、価値流動を伴い、かくして父親の理想性を不安定なものにし、エディプス期に理想像となり得たかも知れない父親は子供の現実への旅立ちによって直ちにその内実を問われることになる。プレインヴィルで父親が権威をもって教えこむ農耕技術は何ら成功に結びつくものではなく、「大企業式営農が全般化すれば完全に消滅する」ものである。ここでは少なくとも少年期以降、父親の権威は空虚なものとなり、青年期迄続く抑圧は理想と乖離しているのである。

## 結 び

父親の在り方の困難さは現代において極大である。序で家庭が社会の原型であると述べたが、それは父親の在り方をめぐって一つの問題を含んでいる。つまり、家父長制家族の場合、その長たる者の権威は家族内にだけでなく、社会的に承認されたものとして実体を持っていた、が現代の細分された核家族はその様な社会的力を持たず、それ故父親の位置は常に問題的なのである。今日それは、いかなる新たな平衡に向っているのであろうか。社会学的問題はさておき、離乳に心的態度の発生を、弟妹の出生に社会的自我の萌芽を、エディプス期に自我理想の形成、つまり自律的自我の出現を見てきた我々の試みは、現時点では有効性を持つと考えるものである。

さて、幼児期人格形成の一応の達成が親への同一視に依ってなされることを見て来たのであるが、これが部分の集積による近似法である模倣の過程と異なることを再確認したい。同一視は一つの構造の全体的な同化であり、この同化はその構造が発達の結果含むであろう内容の識別に先立って可能なのである。この様な構造は内容が空無なのではなく、未分化なわけである。子供は、エディプス期に見た様に、両親の特別な結びつきといった情緒的状况を知的理解に先立って直接的に洞察するのであり、それは知的過程、検閲過程を経る大人の了解よりはるかに鋭いのである。個人の人間関係の基本的形態である人格が知的能力に先立って獲得されることは、それが知的構造の様な、自由な操作性 (J. Piaget) をもつに至らず、問題をはらんだ構造にとどまり、それ故成人においても退行<sup>48)</sup>があり得ることと無関係ではあるまい。先取りと退行を許すこの構造のゆるさは人格が life cycle の各々の段階で再構築され得ることを示すものでもあろう。しかし

幼児期に獲得した原初の資本は変形，修正されるにしても消滅することはないのである。

メルロ＝ポンティは'51年度ソルボンヌ講義「児童心理学の方法」で子供の多形現象，先取り現象，同一視関係を捉える様注意したが，我々がラカンを手がかりに試みたのもこれに他ならない。彼は幻想機能，想像機能の重要性を示すことによって，この原初のプロセスが子供の心的能動性によっていること，又発達の内容をなす具体的形態，つまりコムプレクスがこの能動性によって主体がそこに入りこむ葛藤を通じて形成されるものであることを教えてくれたのである。そして幼児期における家庭の諸条件が人格形成に非常な重要性をもつのは，この先取り現象が子供の能動性を示すものであるが，同時に取捨選択の判断を伴った知的過程ではなく，盲目の同化であり，“とらわれ”による自己形成に他ならないからである。

今日幼児期人格発達の研究は行動観察の方向で著しい進展をみせ（例えば Spitz），更には情緒発達と Piaget 流の知的発達の対応を検証する試み（Th. G. Décarie）もみられる。これらは人格発達の客観的知識を得る上で意味深いものである。注目すべきは，情緒対象が知的対象の形成に先だって有効性を発揮することが検証された点であろう<sup>49)</sup>。これは幼児期の人格発達における想像，幻想の機能の重要性に一定の支持を与えるものと考えられるのである。

注

- 1) フロイト「精神分析入門」人文書院，フロイト著作集 I pp. 88-89
- 2) J. Lacan “La famille” Encyclopédie Française tome VIII 1938 8°40-5（以下 E. F. と略す）
- 3) M. Merleau-Ponty “L'enfant vu par l'adult” Bulletin de Psychologie tome XIII 1964, p. 269.
- 4) E. F. 8°40-6.
- 5) E. F. 8°40-5.
- 6) ラカン「エクリ I」」弘文堂 pp. 203-269.
- 7), 8), 9), 10) E. F. 8°40-6.
- 11) E. F. 8°40-8.
- 12) René A. Spitz “The first year of life” 1965 chap. VIII, “No and Yes” 1957 chap. 7.
- 13) E. F. 8°40-7.
- 14) E. F. 8°40-8.
- 15) スピッツ「母子関係の成りたち」東京同文書院 p. 63.
- 16) Abram Kardiner “The Psychological Frontiers of Society” 1959, p. 147.（以下 P. F. と略す）
- 17) P. F. p. 241.
- 18) E. F. 8°40-8.
- 19) H. Wallon “Les origines du caractère chez l'enfant” P. U. F. 1973 p. 254.
- 20) E. F. 8°40-9.
- 21) H. Wallon “Les origines du caractère chez l'enfant” 3<sup>me</sup> Partie
- 22) E. F. 8°40-9.
- 23) E. F. 8°40-9.
- 24) E. F. 8°40-11.
- 25) ラカン「エクリ I」 p. 131.
- 26) P. F. p. 360.
- 27) P. F. pp. 153-154.
- 28) フロイト「精神分析入門」第21講，「エディプスコムプレスの消滅」フロイト著作集 6，人文書院
- 29) E. F. 8°40-13.
- 30) フロイト「精神分析入門」 p. 170.

京都大学教育学部紀要 XXIII

- 31) 同 p. 272, p. 275.
- 32), 33), 34) E. F. 8°40-13.
- 35) フロイト「解剖学的な性の差別の心的帰結の二、三について」フロイト著作集5, 人文書院 pp. 168-9 その他
- 36) E. F. 8°40-13.
- 37), 38) E. F. 8°40-14.
- 39) M. Merleau-Ponty “Les relations avec autrui chez l'enfant” C. D. U. 1969. p. 60.
- 40) E. F. 8°40-14.
- 41) E. F. 8°40-15.
- 42) E. F. 8°40-16.
- 43) P. F. p. 152.
- 44) P. F. P. 146.
- 45) B. Malinowski “The sexual life of Savages” 1929 Chap. I 1 & 3.
- 46) P. F. p. 374.
- 47) 彼は人間の間の示差的格差をこの原動力と考える。(「今日のトーテミズム」みすず書房 p. 221) この社会学的表現を個人心理学的表現に移せば、エディプスコンプレックスの昇華の機能は人間の内部での示差的格差を原動力とするといえよう。
- 48) 幼児期への退行は正常者でもよくあるが病者の例では胎児期までの退行があり得る。(M. センユエー「分裂病の少女の手記」みすず書房)
- 49) Th. G. Décarie “Intelligence et Affectivité chez le jeune enfant” 1968.

(博士課程大学院生)